

松 井 和 夫

『現代アメリカ金融資本研究序説』

——現代資本主義における所有と支配——

文真堂 1986.11 vii+306+8 ページ

ここ十数年にわたって現代資本主義は、ドラスチックな大変革を遂げてきた。産業構造の急速な変化ばかりで

はなく、各種規制解除にみられるように戦後高度成長を支えた制度的枠組が解体再編成されている。これらの変化は、内外の企業間競争を激化し、産業や金融部門の市場構造の変化をもたらすと同時に国際的規模で経済秩序を動揺させるに至っている。こうした現象は、今日の資本制経済が個々の企業や産業部門のリストラクチャリング過程であるにとどまらず巨大企業とマネーセンター大銀行を中核とする既存の経済的支配構造の動揺・不安定化局面であることを示している。70・80年代の再編成運動の意味と展開方向を明確にするには、現段階の経済的支配構造の正確な理解を必要とする。特に、米系多国籍企業と多国籍銀行が国際的に重要な位置を占めるため、今日の変動期を解析し得る分析枠組と共にアメリカ経済の所有と支配について歴史的パースペクティブを持つ体系的な研究が求められている。この課題は、「金融資本」の概念規定や有効性の是非を巡る論争とはひとまず独立する。所有と支配に関する基礎資料を検討し研究成果の到達点を踏まえて現代アメリカの経済的支配構造分析の構想を示すことを意図した本書の刊行は、時宜にかなったものである。また、著者の膨大な研究が本書に凝集されたことは、最新の研究動向を知り得るばかりでなく、それ自体意義をもつことをまず確認しておきたい。

本書は、2部から構成される。第1章で「問題の設定——本書の構成」を示した後に、第I部「支配構造に関する議会報告の研究」において、アメリカの所有・支配構造研究の基礎資料である主要議会報告書が詳細に紹介され(第2章「バットマン報告の紹介」、第3章「メトカーフ報告の紹介」、第4章「リビコフ報告の紹介」、第II部「アメリカにおける支配構造の研究——その系譜」第5、6章においては、最近の代表的研究(E.S. ハーマン著『企業支配と企業権力』及びB. ミンツ＝M. シュワーツ著『アメリカ企業の権力構造』)の意義と限界が検討されている。本書を貫く著者の基本姿勢は、経営者支配論及び企業と銀行を対立的に捉える大企業自立化論や金融支配説等の伝統的視角を排し両者は互恵的相互依存関係にあるとの視角から、産業企業及び銀行、諸金融機関等の所有と支配・結合関係に関する事実資料の検出と支配・結合関係を維持する各種支配・結合装置についての理論整理を行うことにある。それらを通じて、著者は、独占、特に商業銀行の寡占的金融市場支配を重要な契機とするアメリカ「金融資本」(相互に緊密な結合をとげて寡占的地位を補強しあっている大手金融機関と大手主要企業)理解を提起する。これら紹介・検討は、興味あるファクトファイディングを含み、基礎資料相互の研究上の位置づけ

と補完関係を明確化した点やアメリカ「金融資本」研究の学説整理を試みている点(ハーマンについては、大企業と大手金融機関の結合を金融支配説のように銀行信託部の株式保有ではなく商業銀行の融資等の本来的金融業務を軸とする対等な結合関係の形成と把握した点を評価しつつも、アメリカ金融市場を競争的とみる点を批判し、金融市場の寡占構造解明の必要を指示する。他方、重役兼任制に注目して協調融資体制の意義とNY金融グループを頂点とする金融支配構造を描いた点に画期的意義を持つとするミンツ＝シュワーツについては、「金融資本」の多国籍展開の視点の欠如、協調融資体制の実態分析の不十分性に加え、再編成問題やそれと関連した擬制資本、金融革新や証券化、商業銀行の支払決済機能の意義の分析も欠落している点などに金融市場支配分析の不徹底さを持つとする)など、それ自体言及しなければならない成果を含んでいる。しかし、紙幅の関係上、これらの作業を介して獲得された著者自身のアメリカ「金融資本」理解に焦点を絞ってみたい。

著者は、寡占の大企業群とNY等金融中心地の大銀行群が互恵的相互依存関係にあることが両者の結合関係形成の基礎であると主張する。これら大銀行は、巨大プロジェクト融資等の協調融資体制により金融市場を寡占的に支配し諸金融機関からなるアメリカ金融システムの頂点に立つ。さらに、世界的な支払決済システムの基軸を担い内外の情報収集・伝達と人的コネクションのネットワークを掌握することで支配グループ内の利害調整機能を果たすと同時に社会的資金配分を統御している。大企業にとって寡占的地位を保持するため大銀行との結合は不可欠な条件であり、他方、主導的地位を獲得している大銀行にとっても収益基盤たる大企業との結合を必要とする。両者は、その枠組を離れては相互の寡占的地位の保持が困難な共同利害関係にあるとされる。しばしばマイクロアナリティカルに解釈される傾向があった「金融資本」概念を産業・金融両部面の寡占体の社会的相互依存関係としてマクロ的枠組の下でまず把握することは、リーズナブルであり、企業の銀行離れなどの企業・銀行関係の一定の変容や「金融資本」グループの枠を越えた再編成などの内包化を可能とする。それは、経済的支配構造の研究にとってより操作可能性に富んだ分析枠組となる。また、協調融資体制や支払決済システムの役割についての見解はアメリカ金融市場の支配構造理解にとって重要な問題提起をなす。しかし、結合関係の基底条件として互恵的相互依存関係の存在を承認し得るとしても、それは、結合の必要条件、可能性にすぎず、両者が

集団として長期的構造的結合が不可欠なことを説明するにとどまる。個々の「金融資本」グループにおける支配関係の存在や特定の結合関係の強固性、持続性について十分な説明となりえない。著者は、特定の結合関係は協調融資等の金融支配を前提とする銀行の金融業務(支払決済、預貸業務、特にタームローン)を環として形成され、預貸関係、メインバンク制、株式・社債保有、重役兼任等の人的結合といった多層・重層的に絡み合った各種の支配・結合装置によって維持されていると理解する。その場合、株式などの単一の支配装置に決定的意義を与え所有と支配を論及する論者と異なり、商業銀行の金融業務自体が持つ社会的性格を反映して支配・結合装置も多様・広汎である点を強調する。結合関係が銀行業務を環とする各種支配・結合装置の総体により維持されるとの観点は首肯されるが、多様・広汎性の強調は、各支配・結合装置相互間の機能的序次の希薄化に導く。この点に関して問題となるのは、支配・結合装置総体のなかでの株式所有の位置づけの曖昧さである。著者は、株式所有の意義を全面的に否定しないが、株式所有比率の低さ、機関投資の収益重視の運用態度を根拠に支配・結合関係において決定的意義を持つものではないとし、他の結合装置と同一の位相におく。しかし、「金融資本」グループ間競争が激化し資金供給源が多様化した場合、大銀行の金融市場支配や多様・広汎な結合のみでは、既存の支配・結合関係が危機に瀕した際決定的武器たりえない。特定の支配・結合関係の存続を保証する独自の装置として、分散した株式を危機的局面で結集する機構が存在しなければならないし、また存在すると考えられる。擬制資本市場が発展し企業そのものが擬制資本化している高度にソフィスティケートされた資本制所有システムを持つ社会においては、株式に体化された所有権は危機的局面にのみ発動される。金融機関が定常的には関連企業持株比率を低くし収益性重視の運用態度を取ることができるのも、既存の支配・結合関係や経営権が解体の危機に瀕する時株式を結集、確保し得る機構が制度的に確立されているためと考えられる。動態局面での投資銀行、機関投資家、大銀行からなる株式結集機構を欠いては、特定の支配・結合関係の存続を最終的に保証できない。少なくとも、支配・結合関係を保証する運動機構における株式所有の独自の役割を正しく位置づける必要がある。著者は、支配・結合関係の動態ないし再編成過程の分析の必要を強調し、その際の課題として現代擬制資本論を示唆する。そして、M & A の位置づけの必要性と企業支配権取得における投資銀行、機関投資家及び株式の役割

の重要性を指摘する。しかし、支配構造の動態的把握と本書における構造的把握とは必ずしも統合されていない。産業・金融両部面の寡占的市場支配、特に協調融資体制を分析枠組の基礎としたうえで、預貸関係、人的結合、メインバンク制、株式所有などの各支配・結合装置の階層的な構造を支配・結合関係総体の存続を保証する機構のなかで動態的に関連づける視角が不可欠なのである。その視角からのM & A及び株式結集機構の分析は、株式所有の意義と共に国際的再編の渦中にある現代の所有システムの特徴を再把握することになる。

現代資本主義は、寡占市場や企業・銀行関係など既存の経済的支配構造がア prioriに安定を保証された存在ではないことを多くの事実によって明白にした。「金融資本」の基本構造は、歴史的環境変化による解体の危機を孕んだ人為的システムにはかならない。その存続には独自の保証機構を必要とする。20世紀の歴史動態を通じて形成と弛緩、動揺と再構築の過程として運動する「金融資本」構造存続の保証機構の解析こそ追求されるべき課題なのである。この解明は、今日の再編成運動の特徴を明らかにし、再構築されつつある経済的支配構造の蓄積経路への作用など現代世界の体制的調整過程の問題への接近を可能としよう。最後に次の点も指摘しておきたい。著者は、金融寡頭制やM & Aによる社会的資金配分、資本移動等の市場機能の内部化を指摘し、その理論的含意の重要性を強調する。「金融資本」の動態に関する諸論点は別の角度から互恵的相互依存の根源や内実を深化させることになると思われるが、詳細に展開されていない。本書は、実証的研究及び学説整理によって、アメリカにおける大企業と大手金融機関の結合が産業・金融両部面の寡占的支配と商業銀行の金融業務を環とする多層・重層的な結合装置によって保持されている事実を提示し、上記課題へ向けて貴重な素材と理論的精緻化へ向けて検討すべき分析枠組を提供している。歴史変動の中でアメリカ「金融資本」構造存続を保証する運動機構を明確にし、一層鮮明な全体像を著者が提示されることを願望してやまない。

〔野下保利〕